

世俗を生きる出家者たち：上座仏教徒社会ミャンマーにおける出家生活の民族誌

著者	藏本 龍介
学位授与年月日	2013-12-24
URL	http://doi.org/10.15083/00006488

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 藏本 龍介

藏本龍介氏の論文「世俗を生きる出家者たち—上座仏教徒社会ミャンマーにおける出家生活の民族誌—」は、現代ミャンマーにおける上座仏教の出家者を事例として、出家生活の実態を文化人類学的観点から解明することを目的としている。本論文の論述は、藏本氏が2006年7月から2009年9月にかけて、断続的に合計1年8ヶ月間行ったミャンマー（主として最大都市ヤンゴン及びその郊外）での現地調査によって得られたデータに基づいている。

以下、本論文の各章ごとの概要について述べる。序論にあたる第1章「問題設定」では、先行研究を整理しつつ本論文の問題設定として、現実の出家生活は、律（戒律）の制約ゆえに、教義的理想と経済的現実のジレンマを抱えていることを指摘した上で、こうしたジレンマに出家者自身がどう対応しているのか、その試行錯誤に注目する必要があると述べる。

第1部（第2～4章）「経済的現実への対処」では、現代ミャンマーという経済的現実に対処する出家者の諸相を検討している。第2章「ミャンマー・サンガの歴史と構造」では、第1部の考察対象であるミャンマー・サンガ（出家者集団）の歴史と構造について、ミャンマー・サンガは、組織としては形式的なまとまりに過ぎないが、都市僧院を中心とした出家者のネットワークがその同質性とまとまりをもたらしていると指摘している。第3章「都市を生きる出家者たち」では、最大都市ヤンゴンを事例に、出家者と都市社会の関係について、特に財の獲得という局面に焦点を当てて検討している。そして都市僧院の経済基盤や、都市における出家者による在家者向けサービスを分析することによって、都市は出家者にとってチャンスに満ちた空間となっていると論じている。第4章「僧院組織の実態と問題」では、僧院組織を単位とした財の所有・使用の諸相を分析している。そして僧院組織は、管財人としての在家者の存在を不可欠のものとするがゆえに、出家生活の清浄性や安定性が、在家者によって左右されてしまうという問題があると指摘している。

つづく第2部（第5～7章）「教義的理想の追求」では、ヤンゴン郊外にある二つの僧院を事例として、律遵守の試みがどのように展開しているかを検討している。第5章「挑戦の始まり」では、第2部の考察対象である二つの僧院が、律厳守を標榜して森に拠点を構える「森の僧院」であることを指摘した上で、こうした試みが植民地期以来の仏教改革運動に根ざしていると論じている。第6章「『出家』の挑戦」では、「森の僧院」が社会との関係をいかに調整しているかという問題を、人類学における贈与論を参照しつつ検討している。そして「森の僧院」は「与える」／「受け取る」ことを拒否することによって<世

俗＝贈与交換＞の世界を超えようとしており、それが都市社会と結びつくことによって一定の成功を収めている一方で、現在進行中の富裕化が「出家」の理想を掘り崩す可能性があることを指摘している。第 7 章「僧院組織改革の行方」では、在家者に僧院管理を委ねるという僧院組織改革の実態と問題を検討している。そしてこうした試みが出家生活の清浄性と安定性に寄与している一方で、正当性という問題がつきまとうがゆえに、二つの僧院の間で対応が分かれていることを指摘している。

以上を踏まえて第 8 章「結論」では、戒律と現実の経済的制約の間には、複数の解の可能性があるが、その矛盾を完全に解く最適解がないがゆえに、出家者たちは多様な試行錯誤を通して、常に新たな実践形態を生み出す必要があることを論じている。

本論文の意義は、第 1 に、ミャンマーにおける長期間の現地調査に基づき、出家生活に内在するロジックを実証的に明らかにしたことにある。この点は、先行研究の少ないミャンマー仏教研究に寄与するだけでなく、社会的現象としての仏教の歴史的展開を解明する上できわめて意義深く、国際的にも引用可能な業績との評価をえた。

第 2 に、律という明文化された教義をいかに実践しうるかという問題を主題として取り上げることによって、現場研究を主とする人類学と、文献研究を主とする仏教学が交錯する領域に挑戦し、仏教研究における新しい研究領域の開拓に寄与したことにある。この点は、上座仏教における教義と実践の関係を考える上できわめて重要である。

第 3 に、教義的理想と経済的現実の葛藤に注目することによって、仏教研究のみならず、キリスト教やイスラームなど、教義をもつ制度宗教研究にも援用可能な方法論を提示したことにある。この点は、変動著しい現代社会における制度宗教の行方という問題を、現場に即して具体的に検討する上で、きわめて有効な視点となりうる。

審査委員会においては、現地語における世俗と社会という語のニュアンスについての言及の不足や、出家世界の描き方がやや長老中心主義に偏っている、あるいは超歴史的な図式にみえる面もあるといった指摘もでた。しかしこれらは、本論文全体の価値を損なうほどの瑕疵ではないことが審査員全員によって確認された。したがって、本審査委員会は本論文提出者に博士（学術）を授与するにふさわしいものと認定する。